

学者、教育者、作家

著者	小川 正巳
雑誌名	神戸外大論叢
巻	34
号	3
ページ	121-124
発行年	1983-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002013/



学者，教育者，作家

小 川 正 巳

天理大学で、助教授をしていたとき、ドイツ語、フランス語、イスパニア語の教師たちはよくともに酒をくみかわした。そのような酒席で、フランス語の助教授Hが憂鬱な顔をして言った言葉は、妙に私の記憶のなかにずっと生きつづけている、Hいわく、「私は結局 *savant* (学者) にも、*éducateur* (教育者) にも、はたまた *écrivain* (作家) にもなり切れない」。当時、私はこの言葉を、正直に言って、なかば侮りの思いで聞いていたが、その後、私の人生の枠をつくった外大三十三年の生活をふりかえってみると、Hは私の人生の予言をしたかのように思われる。

<学者>にもなり切れなかった。私とても、始めはいくばくかの自負を持っていた。卒業論文に、当時難解といわれていたライナ・マリア・リルケの『ドゥイノーの悲歌』を解明し、戦後には、私とは大学が同期で、神戸大学に務めていた故戸田政雄、私の天理大学での教え子で、後に天理大学で教鞭をとっていた故北村清吉、大学の一年先輩で、甲南大学の学長にもなった鈴木正治等とシュテファン・ゲオルゲの全詩集を手書き（資料入手困難な時代であった）で読破し、次いで私はゲオルゲの関係から、皆から離れてホフマンスタールに移って行った。近代ドイツの三大詩人を、兎に角通過したという感じであった。もっとも最後のホフマンスタールの星座からは、今もって脱し切れたとは言えない。というのは、このホフマンスタールを入口として、私の好奇心は、その伝統に従って、通時的に、オーストリア文学の過去にさかばって行った。私はドイツ文学を、ドイツ本国ではなくてオーストリアにおいて考えていた。ライムント、ネストロイ等のウィーン民衆劇、さらにそ

のむこうのドイツ、ヨーロッパのバロック芸術にさかのぼった。それと平行して、同人誌『くろおぺす』の連中の一部と、T・S・エリオットの輪読会、さらにこれもさかのぼって、エリオットに深い影響を与えたダンテの『神曲』の輪読会、さらにダンテの『神曲』に深い影響を与えたウィルギリウスの『アエネアス』の輪読会。ウィルギリウスの次にはホメロスに行くべきであったが、当時の私の歴史への嗜好が、シェークスピアの「歴史もの」(histories)の輪読会に、ユーザーさせた。ホフマンスタールとダンテを結ぶE・R・クルチウス並びに彼の『ヨーロッパ文学とラテン的中世』は、私には衝撃的な本であった。クルチウスは私のヨーロッパ観を決定したといっている。シェークスピアの輪読会は、喜劇を読みあげて、いよいよ「歴史劇」にはいった段階で、大学闘争によって解体した。長い輪読会をともにした岸本通夫、桂田重利、そして物故した二宮尊道には感謝の念を禁じえない。大学闘争の炎のなかから甦った私の好奇心は、エルンスト・ブロッホ、ヴァルター・ベンヤミン、そしてブレヒトに移行する。中岡哲郎を中心として、全共闘の学生と行った＜若きマルクス＞の輪読会は、私にマルクスへの眼を開いてくれた。オーストリアをホフマンスタールで見ていた私に、カール・クラウスのオーストリアを教えてくれたのは、私とともにウィーンにいた当時神戸大学の池内紀であった。ブロッホ、ベンヤミン、ブレヒトについては、京都大学の野村修、池田浩士、好村富士彦（のちに広島大学）といった先達の拓いた道がなければ、容易に近づくことはできなかったであろう。野村修は、さきに、文部省の科研の「現代芸術研究会」に招いてくれたし、のちに池田と野村とともに始めた同人誌『匙』に招いてくれた。そして『匙』は今も続いている。

大学闘争とともに、私は学界から離れて行った。学界とともに、生きたドイツ、ヨーロッパとの接触からも離れて行った。今で思えば、「本家持ち」のドイツ、ヨーロッパ文学研究の限界を感じたのではないかと思う。私は青年時代、ドイツ文学の大家たちが、年とともに枯れて、日本文化に復帰して

ゆくのを見て、にがにがしく思っていた。しかし私も年とともに、ヨーロッパは私だという思い込みのむなしさを感じるとともに、いかに私は自分の生きている基盤、ならびにその周辺の文化に無知であったかを思い知らされるようになった。ある日、私は朝鮮人にまじって、白頭山を主題とした交響楽を聞いていたが、私はいきなりデュッセルドルフに置かれたら、何とかやってゆけるだろうが、もし隣国の白頭山の麓に置かれたら、全くどうしようもないという思いにつき当って、愕然とした。さいわい、外大の大学院で、比較文学を持たされたことは、今まで学んだヨーロッパと、これから学ぶ日本、アジアとの比較の視座を与えられたと理解して、早速、日本文学者吉本隆明、次いで野間宏のなかの、主として外国文化の影響の腑分けをしてみた。吉本、野間に共通する親鸞体験をもとに、キリスト教の家庭に育った私としては、浄土真宗を学び、外大最後の比較文学の講義は、「一向一揆とドイツ農民戦争」の序文とした。目下、トーマス・ミュンツァーを読み、井上鋭夫の『一向一揆の研究』を読んでいる。

＜作家＞にもなり切れなかった。私はフランス風に、昔から、文学に関しては、文学研究者よりも、文学創造者（作家）の方を高く評価してきた。私が詩を書きだしたのは、シュテファン・ゲオルゲの輪読会の過程においてであった。手書きをしたゲオルゲ張りの詩を、私は富士正晴主宰の同人誌『ヴァイキング』に発表した。『ヴァイキング』には、当時外大の同僚であった島尾敏雄や、かれと大学で同じだった庄野潤三がいた。それ以前、大学時代、私は三高の先輩である織田作之助や青山光一などがつくっていた同人誌『海風』に所属して、散文らしきものを書いていた。ゲオルゲに次いで、私の詩作に自由な **diction** を与えてくれたのは、これまた輪読会を行っていたT・S・エリオットであった。エリオットがラフォールグやユルビエューによって、新しい詩概念を得たように、私はエリオットの『荒地』や『四つの四重奏』によって、新しい詩の語り口を得た。つまり私は日本語で詩を書きながら、その詩概念は、久しくヨーロッパのものであった。私は詩作においても、日

本回帰を果さなければならないと思っている。私は私が発行した同人誌『くろおべす』、小島輝正が発行している『たうろす』に、詩を書いてきた。詩だけではなく、学術雑誌的制約のないそれら同人誌に、私はダンテ、エリオット、ゲオルゲ、ホフマンスタール、クルチウス、さらにブロッホ、クルチウス等について自由に書いてきた。なお私の詩作に刺激を与えてくれた詩人は、同人誌の仲間安永稔和であり、多田智満子であり、私の尊敬する詩人は、『ヴァイキング』の井口浩であり、プロレタリア文学詩人であるとともにドイツ文学者である田木繁である。

＜教育者＞にもなり切れなかった。私は久しく、教室には、私しかいなかった。教室には、私以外に学生もいるということを痛いほど思い知らしてくれたのは、大学闘争における全共闘の学生だった。さらに私は外大における部落差別事件の確認会に出席することによって、私は私が坐っている椅子が、多くの人々の心をふみつけていたということに、始めて気づかされた。私は痛いという言葉によって、椅子から立上って、あやまらねばならなかった。私の視野は被差別者にまでひろがりはしたが、それが教育実践のうえに、さらにまた私の思想のうえに、どのような影響を与えるかは、いまだ模索中である。しかしその時以来、私は私の教室に私以外に学生がいるということ、そしてその学生の背後には、教室のそと、地下にまで続く深い裾野が尾をひいているということを考えるようになった。

私は私の人生の杵をつくった外大三十三年の生活をあとにして、私はこれから私の好奇心に導かれて、次から次へと好奇心の対象を替えてゆくであろうと思うが、それとともに、私は何か円周が閉じたという感じもないではない。従って、私は今まで余りにも早く走りすぎて、棄てさった累々たる死体を、もう一度取りあげて、今度は納得がいくまで咀嚼して、円環のなかに重みを与えたいと思う。つまり納得して、死にたいわけである。